

▼ コラム

1 | 2 | 3 | 4 | 5 | ▶ Next



小崎哲哉
現代アートのプレイヤーたち

危うし、美術館！（2）：スペインと韓国と日本の「規制」

2016年02月17日（水）14時30分



バルセロナ現代美術館のバルトメウ・マリ館長は、イネス・ドゥジャックの出展作が卑猥であるという理由で、翌日に開幕を控えていたグループ展の開催中止を決定した。EFE ESTILO-Youtube

2015年3月17日、バルセロナ現代美術館（MACBA）のバルトメウ・マリ館長が、翌日に開幕を控えていたグループ展『La bestia y el soberano (獣と主権者)』の開催中止を決定した。イネス・ドゥジャックの出展作「Not Dressed for Conquering（征服には似合わない装い）」が卑猥であるという理由である。

同作は、ナチス親衛隊のヘルメットを敷き詰めた上で、前スペイン国王のファン・カルロス1世、ボリビアの女性活動家ドミティラ・チュンガラ、それに1匹の犬が全裸・後背位で折り重なって性交する様を描いた彫刻。MACBAのチーフキュレーター、バレンティン・ロマは「ドゥジャックは、植民地主義のダイナミクスに踏み込む研究史に明るい、よく知られたアーティスト」であり、「アートは何世紀にもわたって典型的な権力を風刺し、戯画的に描いてきた。彼女の作品がやっているのはそういうことだ」（2015年3月18日付エル・ペニスコ「El rechazo de una escultura en el Macba desata polémica y protestas」）と説明している。付け加えれば、『獣と主権者』展はシュトゥットガルトの美術館ヴュルテンベルク・クリストフェラインとMACBAの共催であり、展覧会名は、寓話などに登場する動物の形象から権力について論ずる、哲学者ジャック・デリダの同名の講義録に由来する。

だが、マリは「この作品は不適切であり、美術館の方向性とは相容れない」と表明。作品を観たのは前日の16日が初めてで、最後の瞬間に作品を潜り込ませたとキュレーターチームを非難した。ドゥジャックは直ちに作品借用書の画像をネット上に公開。作品の写真が掲載された借用書には、2月25日付で館長の署名が記されていた。マリが事前に作品の内容を認識していたことを示す紛れもない証拠である。キュレーターチームや同展の他の参加作家は抗議声明を出し、内外のアート界からも

非難の声が殺到した。

中止決定には政治的圧力があったのではないか、という疑惑も出た。MACBAは非営利の民間財団と、カタルーニャ州政府、バルセロナ市、そしてスペイン文化省を主要メンバーとするコンソーシアムが運営している。財団の名誉理事長であるソフィア王妃は、彫刻のモデルにされたファン・カルロス1世の妃にほかならない。マリは「理事会はこの件とは無関係。中止決定は自らの判断で下した」と圧力を否定したが、たちまちソーシャルメディアが炎上した。現場スタッフは上層部に説明を要求し、MACBAには展覧会の開催中止に抗議する市民グループが押し寄せた。マリは3月20日に中止決定を撤回し、『獣と主権者』展は翌21日にドゥジャック作品を含む完全な形で開幕した。

1 2 3 4 5 ▶ 次のページ

▼ この筆者のコラム

終章 現代アートの現状と未来 2017.07.14

絵画と写真の危機 2017.06.19

現代アート採点法 2017.05.16

現代アートの動機（4）：エロス・タナトス・聖性 2017.04.17

現代アートの動機（3）：思想・哲学・世界認識／私と世界・記憶・歴史・共同体 2017.03.29

現代アートの動機（2）：制度への言及と異議／アクチュアリティと政治 2017.03.09

現代アートの動機（1）：新しい視覚・感覚の追求／メディアの探究 2017.02.14

▶ 記事一覧へ

▼ プロフィール



小崎哲哉

1955年、東京生まれ。ウェブマガジン『REALTOKYO』『REALKYOTO』発行人兼編集長。京都造形芸術大学大学院学術研究センター客員研究員。2002年、20世紀に人類が犯した愚行を集めた写真集『百年の愚行』を刊行し、03年には和英バイリンガルの現代アート雑誌『ART iT』を創刊。13年にはあいちトリエンナーレ2013のパフォーミングアーツ統括プロデューサーを担当し、14年に『続・百年の愚行』を執筆・編集した。

▼ 今、あなたにおすすめ

スティーブ・ジョブズがい 世界の「日本人ジョーク」 「3.9+5.1=9.0」が、ど 中国政府の外国浸透作戦に
つも黒のタートルネック… に表れる、安倍首相の際… うして減点になるのか？ は要注意（李小牧）

パーフェクトな容姿に「変 日本の写真は「自撮り、食
身」したイバンカ その… べ物、可愛いペットが多…

▼ コラム

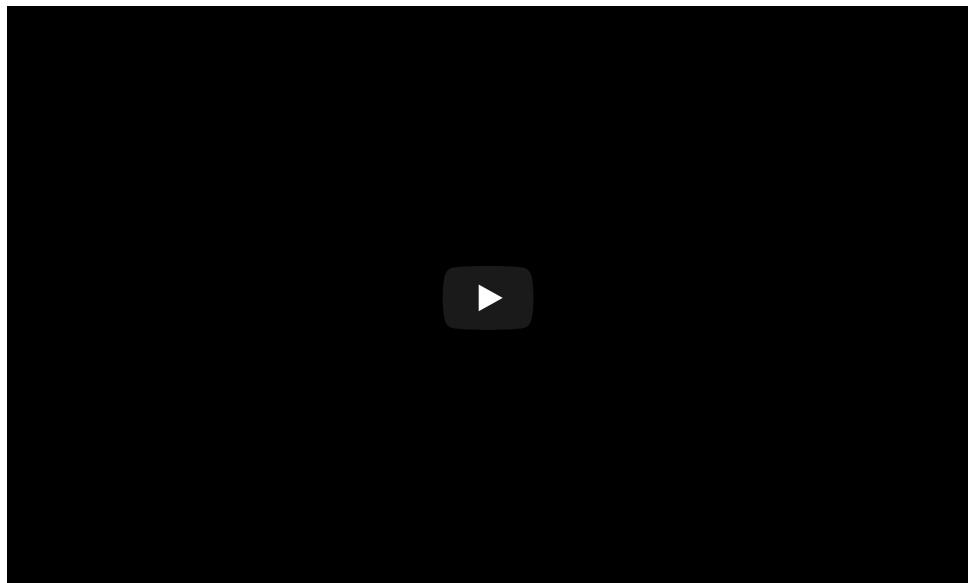
Prev ← | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | → Next



小崎哲哉
現代アートのプレイヤーたち

危うし、美術館！（2）：スペインと韓国と日本の「規制」

2016年02月17日（水）14時30分



イネス・ドゥジャックの「Not Dressed for Conquering（征服には似合わない装い）」

マリは結局、開幕翌日の22日に辞任に追い込まれる。しかしその直前に、ロマとパブリックプログラムの責任者ポール・プレシアドを、館長権限で解雇することを忘れなかった。意趣返しというわけだろうが、後味のいい話ではない。

抗議の辞任と韓国への飛び火

この話はこれでは終わらない。事件から半年以上が経過した2015年11月、CIMAMの理事を務める3人の美術館長が、理事職を離れると発表したのである。アラブ近代美術館（ドーハ）のアブデラ・カルン館長、SALT研究＆プログラム部門（イスタンブル）のヴァシフ・コルトン・ディレクター、ファン・アッペ美術館（アントホーフェン）のチャールズ・エッシュ館長。いずれも、国際展企画経験が豊富な辣腕キュレーターにして批評家である。CIMAMは、日本語の定訳は「世界美術館会議」だが、直訳すると「モダンアートの美術館およびコレクションのための国際的委員会」。公式ウェブサイトの説明には「近現代アートの収集および展示に関する理論的、倫理的、実践的問題を議論するための専門家から成る国際会議」と記されている。1962年に設立され、2015年現在、63ヶ国計460人のメンバーが所属する。

辞任の理由は、CIMAMの理事長がバルトメウ・マリその人だったことだ。CIMAMは事件発生直後の4月に、マリが理事長職に留まることを公式に発表している。3人の館長が辞任の際に出した声明を以下に訳出する。

「我々は、現代の諸問題に積極的な関心を抱く美術館が、様々な意見を自由に交換し、政府の方針

や社会の多数派の意見、それらとの相違についての法律論議が許され、奨励される場であるべきだと考えます。美術館は、新しい着想や可能性を社会に導入しうる重要な場のひとつであり、それゆえに脅威にさらされることがあります。我々は今日におけるCIMAMの重要課題が、可能な限りこの議論の場を擁護し、行動の倫理的な規範を、アーティスト、キュレーター、観客に指し示すことであると考えます。昨今のMACBAにおける、またCIMAM理事会内部での一連の出来事によって、我々は現理事長がこうした価値を確実に擁護しうるかどうかについて疑念を抱くに至りました。したがって理事を辞任する以外の選択肢はないと感じています。理事会がCIMAMメンバーの利害関係をいかに代表するかに、もはや確信が持てないからです。我々はメンバーとしては残留し、CIMAMが近い将来、新しい指導力のもとに信頼性を取り戻すことを望みます。理事会が、未来の指針をきちんと定めることを願っています」（Statement of Resignation from three Members of the Board of the International Committee of ICOM for Museums and Collections of Modern Art (CIMAM) 09.11.2015）

この話はこれでも終わらない。2015年12月2日、マリが韓国国立現代美術館の館長に内定し、14日に着任したのである。公募による選任だが、12月3日付の東亜日報によれば、美術館を管轄する文化体育観光部は「面接でMACBA企画展問題について『美術館を保護するためにすべての責任を負って辞任した』という説明を聞き、特に問題はないと判断した」と語ったという。任期は3年で、外国人が担当するのは史上初めてである。

館長候補の筆頭にマリの名前が挙がったとき、韓国のアート界は即座に反応した。11月に「国立現代美術館館長へのバルトメウ・マリ選任の可能性に反対する公開ペティション」がフェイスブック上で立ち上げられ、わずか3日で800筆を超える署名を集めたのだ。中には、国際的に著名なアーティストのク・ジョンアやヤン・ヘギュの名前もある。

反応の素早さには理由があった。2014年の夏に、限りなく検閲に近いスキャンダルが起こっていたのだ。光州ビエンナーレ開催20周年を記念した特別展『甘露- 一九八〇その後』に依頼され、アーティストのホン・ソンダムと、ホンの同志である光州視覚媒体研究所のメンバーが共同制作したコルゲクリム（掛け絵）「セウォル五月」が、展示拒否の憂き目に遭ったのである（近年、韓国では同様の事件が映画や演劇分野でも起こっている）。

ホン自身による「《セウォル五月》に刻まれた入れ墨『戒厳令』と『靖国』」（翻訳・岡本有佳。『インパクション』197号所収）、経緯を詳しく報じた古川美佳のレポート「光州ビエンナーレ2014特別展 展示拒否事件」（『5 Designing Media Ecology』02号所収）および岡本有佳のエッセイ「2014光州ビエンナーレの『検閲』をめぐって」（2015年2月20日発行『あいだ』218号所収）、ケート・コロックがディレッタント・アーミーに寄稿した「「Beyond the Detail: Censorship at the Gwangju Biennale」」に加え、ハンギョレ日本語版（2014年8月8日付チョン・デハ「カカシ 朴槿恵の図 結局、鶏に変えて出品」）、コリア・ヘラルド（2014年8月18日付。イ・ウヨン「Gwangju Biennale marred by politics」）など複数のウェブジャーナリズムに拠りつつ、事件を振り返ってみよう。

前のページ ▶ | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | ▶ 次のページ

この筆者のコラム

終章 現代アートの現状と未来 2017.07.14

絵画と写真の危機 2017.06.19

現代アート採点法 2017.05.16

現代アートの動機（4）：エロス・タナトス・聖性 2017.04.17

現代アートの動機（3）：思想・哲学・世界認識／私と世界・記憶・歴史・共同体 2017.03.29

現代アートの動機（2）：制度への言及と異議／アクチュアリティと政治 2017.03.09

現代アートの動機（1）：新しい視覚・感覚の追求／メディアの探求 2017.02.14

▶ 記事一覧へ

コラム

Prev ← | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | → Next



小崎哲哉
現代アートのプレイヤーたち

危うし、美術館！（2）：スペインと韓国と日本の「規制」

2016年02月17日（水）14時30分

カカシにされた大統領

作品名からわかるだろうが、「セウォル五月」はセウォル号沈没事件に取材した作品である。250×1050cmという横長の画面の中央に、実際には船から脱出できなかった高校生たちを助け出すべく、沈没したセウォル号を逆さに持ち上げる巨大な男女像が描かれている。白シャツ、黒いパンツ姿に鉢巻きを巻いた男性は右手に銃を持ち、黄色と赤の伝統的衣裳を身に纏った女性は左手にキムバブを入れたボウルを携えている。キムバブは日本の海苔巻きに由来する巻き寿司で、1980年の光州事件の際に、政府に対して立ち上がった学生や市民に女性たちが差し入れしたもの。つまりこの男女は光州事件に参加した人々の象徴である。



BERICHT, SÜDKOREA, VERANSTALTUNGEN

Veröffentlicht am 30. April 2015

Offener Brief: Demokratie in Korea



BEITRÄGSKATEGORIEN

- Allgemein
- Bericht
- Bücher
- EPRIE
- Filme
- Interview
- Kommentar
- Korea Forum
- Kunst und Kultur
- Madang
- Migration
- Nordkorea
- Presse
- Spendenaufruf
- Südkorea
- Trostfrauen
- Veranstaltungen

SCHLAGWÖRTER

- 1000 Mittwochsdemo
- Aktionsgruppe
- Trostfrauen Amtserhebung
- Atombombe Berlin Biografie

ドイツ語ウェブサイト「KOREA VERBAND」に載ったホン・ソンダム「セウォル五月」。上が修正前、下が修正後。

銃を持った男性は画面の左側にさらに何人かいて、血相を変えたパク・クネ大統領と激論を交わしている。大統領は一本足のカカシに見立てられていて、背後にいる軍服姿の父親パク・チヨンヒ元大統領と、黒服姿のキム・ギチョン秘書室長に操られているように見える。その後ろには大統領の腰巾着的な側近と、韓国最大の財閥サムスン・グループの総帥、イ・ゴンヒ会長が控えている。

ほかに従軍慰安婦、安倍晋三首相、金正恩第一書記らも描かれていて、要するにこの作品は、光州

事件やセウォル号沈没事件は偶発的に起きたのではなく、韓国や東アジアの近現代史に内在する政治社会的な矛盾が生じさせたものと告発しているわけだが、問題となったのはパク大統領まわりの描写だった。

特別展は「国家暴力に対する記憶と証言、あるいは抵抗精神を秘めながら、また、その抵抗精神や傷痕に対する治癒のメッセージを有する作品を、韓国内外の重要作家47名の作品で構成する」という趣旨で、「セウォル五月」は上述したとおりビエンナーレ財団に依頼されたもの。しかし制作中に、特別展協力キュレーターのひとりが当該箇所をスマートフォンで撮影し、光州市の文化官僚に見せてしまう。古川によれば「心配になり」、ホンによれば「業績を立て昇進したかった」から。

開幕前の7月に、写真を撮った協力キュレーターと特別展責任キュレーターのウン・ボンモが、2度にわたってアトリエを訪れる。「この絵のために、中央政府から光州市に回される予算が削減されかねない」と言われたときには「すでに決まった予算が、そんな理由で削られるわけではない」と断つたが、2度目にはホンも折れ、大統領の顔を白で消すか鶏の顔に修正するという対案を出した。ふたりのキュレーターは鶏の顔案に同意。しかし、修正案は火に油を注ぐ結果を呼んだ。

韓国では、鶏は何でもすぐ忘れてしまうというイメージがある。また、韓国語で鶏はタクというが、パクという音との近似から、パク・クネには「タックネ（鶏のクネ）」というあだ名が付けられている。8月に入り、修正案の写真を見せられた光州市の役人は、鶏の頭を別のものに描き換えるか、パク元大統領の階級章と黒のサングラスを取り除き、秘書室長とイ会長も消すようにしろと協力キュレーターを通じてホンに要請した。ホンは「役人の修正要求をそのまま作家に伝える、それがキュレーターのすることか」と怒ってこれを拒否。結局、特別展開幕前日の8月7日、オ・ヒヨングク副市長が、ウン・ジャンヒョン市長と意見調整した上として「展示を許可しない」との声明を出し、ビエンナーレ財団は開幕当日の8日に「展示留保」を発表した。事実上の展示凍結である。

この間、世論が反発すると、市民運動家出身のウン市長は「自分の言葉が誤解された。市は、文化芸術支援はするが干渉はしない」と釈明した。しかし水面下では、運動でともに闘ったホンに「展示しないでほしい」というメールを送っていたという。展示凍結後、特別展に出演していた韓国人作家3名が作品を撤去し、11名が市長に嘆願書を送った。沖縄の佐喜眞美術館が所蔵する作品を出展する写真家3名を含む日本人関係者も、連名でホンの作品を展示するよう要請する書簡を送った。参加作家で映画監督でもある大浦信行は、自作の版画を裏返して床に置き、「検閲に抗議する」との一文を貼り、さらに自作映画の上映を中止せよと要求。光州の主催者は守勢に立たされた。

責任キュレーターのウンは10日に辞任を発表し、「行政官僚からの脅迫に近い修正要求を受けた」と光州市とビエンナーレ財団を批判した。13日には、ビエンナーレ財団と展覧会を共同主催する光州市立美術館のファン・ヨンソン館長も辞意を表明し、18日にはビエンナーレ財団のイ・ヨンウ代表が辞任記者会見を開いた。会見の席で、批評家でもあるイ代表は「アート批評家という観点からは、作品は展示されるべき。一國の大統領を風刺することがタブーであるとは私は思わない。芸術的な表現の自由は、展覧会経費予算を政府が握っているという理由だけで制限されてはならない」と語った。

ホンは、24日に記者会見を開き、ウンの復帰と事態収拾を条件に展示要求を取り下げると発表。作品を自主撤去した3作家には元に戻すようにと呼びかけた。その後も作家による抗議活動が行われたり、特別展関連シンポジウムで検閲がテーマにされたりしたが、ホンは『インパクション』に寄稿した論考で、要求を取り下げた理由について以下のように述べている。「ビエンナーレ本展開幕式を控え、本展示に招待された仲間の画家たちに迷惑をかけたくなかったためもあったが、何よりもビエンナーレ財団と光州市とが、おたがいに責任をなすりつける姿に私の胸が痛んだためでもあった。ウン光州市市長は7月に就任したばかりで、自分がビエンナーレ財団理事長でもあるという事実をまったく知らなかったのだ。彼は結局自分自身に責任を転嫁するというコメディを演出したのである」

▼ コラム

Prev ← | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | → Next



小崎哲哉
現代アートのプレイヤーたち

危うし、美術館！（2）：スペインと韓国と日本の「規制」

2016年02月17日（水）14時30分

東京都現代美術館の「ばっくれ」

話を韓国国立現代美術館の館長人事に戻そう。バルトメウ・マリは着任後の2015年12月14日に記者会見を開き、「あらゆる種類の検閲に反対する」と言明するとともに、MACBAでの事件に関する報道は間違っていると主張した。同日付の『聯合ニュース』英語版（パク・ソジョン「Bartomeu Mari says stands against 'all kinds of censorship'」に基づき、マリのコメントを訳出する。

「私はあらゆる種類の検閲に反対し、表現の自由を支持する。それが私の価値観だ。指名に反対するアーティストがいることは残念だが、支持してくれる人も多い。ある人々がいう過去に起こったことではなく、ここで何をするかによって評価されることを望む」「『獣と主権者』展の開幕が遅れたのは、ある情報が私には隠されていたからだ。そして私には、適切に対応する時間が十分になかった。開幕を遅らせたという過ちを犯したことは認める。その過ちが生んだ非常にネガティブな結果を考慮して、私は辞任を申し出た」

この話はまだまだ終わらない……といくらでも書き続けることはできるが、もうやめておこう。ひとつだけ書いておきたいのは、これほどひどい事件の中で唯一救いといえるのが、関係者が曲がりなりにも発言しているということだ。規制された側が抗議の声を上げるのは当然として、規制した側のバルトメウ・マリも、ユン・ボンモも、ユン・ジャンヒョンも、イ・ヨンウも（説得力は誰ひとりとしてないとはいえ）、懸命に弁明に努めている。スペインも韓国も一応は民主主義国家であり、現代アートは言説のやりとりとともに発展を遂げてきたのだから、それは当たり前のことだ。艾未未（アイ・ウェイウェイ）や劉曉波（リュウ・シャオポー）やブッキー・ライオットをはじめとする多数の表現者を弾圧する中国やロシアとは異なり、民主主義国家では、主催者、運営者、企画者は、いかなる表現ジャンルであろうと言葉によるアカウンタビリティ（説明責任）を求められる。公立の美術館であれば（いや、私立であっても）いまさら言うまでもないことである。

それに比べれば我が国は……と愛國者として胸を張りたいところだが、ご存じの通り日本の事情もスペインや韓国と大差ない。いや、規制した側が謝罪はおろか経過説明もせず、規制した事実すら認めない（公式に発表しない）という点では上述のふたつのケースに劣る。例えば、2015年夏に東京都現代美術館（MOT）で起きた会田誠と会田家（会田、会田の妻でやはりアーティストの岡田裕子、息子の会田寅次郎）の作品2点に対する「作品撤去要請」（会田誠「東京都現代美術館の『子供展』における会田家の作品撤去問題について」を参照）について、SNSが炎上し、新聞やウェブメディアで相当に話題になったにもかかわらず、MOTも、撤去を自ら要請したというMOTチーフキュレーターの長谷川祐子も、現在に至るまで公式会見も文書による発表も行っていない。

当該作品のひとつは、会田家の3人が文部科学省の教育方針へのいちやもんを下手くそな墨文字で綴った「檄」。もうひとつは、安倍晋三によく似ている会田が自らの風貌を活かした「国際会議で演説をする日本の総理大臣と名乗る男のビデオ」。いずれも軽い笑いを誘うユーモラスな作品で、重量級の「Not Dressed for Conquering」や「セウォル五月」とは比べるのがばからしくなるほどのものだ。長谷川は日本を代表するキュレーターで、国際展の企画を多数行っているが、ユーモア感覚

はともあれ、国際的に共有された常識であるはずの「表現の自由」や「説明責任」という語彙は、彼女の辞書には収録されていないらしい。



会田家「檄」 展示風景：「おとなもこどもも考える ここはだれの場所？」 東京都現代美術館、2015 Courtesy Mizuma Art Gallery



会田誠「国際会議で演説をする日本の総理大臣と名乗る男のビデオ」2014 ビデオ（26分07秒）(c) AIDA Makoto
Courtesy Mizuma Art Gallery

▼ コラム

Prev ← | 1 | 2 | 3 | 4 | 5



小崎哲哉
現代アートのプレイヤーたち

危うし、美術館！（2）：スペインと韓国と日本の「規制」

2016年02月17日（水）14時30分

アーティストグループChim↑Pomの受難

MOTは、ほかにも検閲、もとい規制を行っている。会田誠と会田家への「作品撤去要請」が話題になっている折も折、同時期に東京のアーティストランギャラリーGarterで開催された、アーティストグループChim↑Pom（チンポム）の結成10周年記念展『耐え難きを耐え↑忍び難きを忍ぶ』展で、その事実が明らかになった。会田誠の弟子筋に当たるChim↑Pomのリーダー、卯城竜太は「検閲や自肃などの問題が起こると、すぐに美術館たたきが始まつて、作品の背後にある社会的な問題が議論されなくなるのはもったいない。主催者が加害者で、アーティストが被害者という二項対立もおかしい。会田さんもそうだろうけど、Chim↑Pomも美術館などとの交渉の結果、妥協を受け入れ続けてきた。この展覧会はChim↑Pomの『黒歴史』でもある」と述べている（筆者宛のEメールより要約・抜粋）。潔い言明だが、ともあれ以下は、同展に出展された「堪え難きBLACK OF DEATH」というビデオ作品に付けられたキャプションである。面白いから、作家の同意を得て全文をそのまま転載する。

「ありがたいことに東京都現代美術館が本作を収蔵してくれて、コレクション展にも出品してくれた。しかしコレクションする際と展示する際に打診されたのは、通称ナベソネハウス（読売新聞グループ会長・渡邊恒雄氏の自宅マンション）上空にカラスを集めたシーンをカットすること。真意は今だに定かではないが、ジブリ展などで讀賣との関係が深い故かと勘ぐり最初は拒否してみた。が、別に個人攻撃が目的でないしカットしたからといって作品全体のコンセプトにも影響はない、なにより面倒くさかったので、時期（彼がお亡くなりになった後）がきたら元に戻すように指示して合意。意図せずして『死』が作品に影響を与えたこのバージョンこそは、まさにタイトル通りの『BLACK OF DEATH』。」



調べてみると「真意」は実に単純だった。この作品の収蔵をMOTがChim↑Pomに打診したのは、氏家齊一郎が館長職に就いていた2008年のことだという（収蔵決定は2013年）。「ナベツネカットバージョン」の展示は2014年）。2002年の就任以来、2011年に亡くなるまでMOTの館長を務めた氏家は、東大卒業後に読売新聞社に入社し、日本テレビ放送網代表取締役会長、読売新聞グループ本社取締役相談役を歴任している。ナベツネこと渡邊恒雄とは高校、大学ともに同窓で、「盟友」と称される人物だった。いやあ、わかりやすい。

『耐え難きを耐え↑忍び難きを忍ぶ』展では、もうひとつ見逃せないキャプションがあった。「耐え難き気合い100連発」というビデオ作品のものだ。この作品に検閲、もとい規制を行ったのは、美術館ではなく国際交流基金。ヴェネツィア・ビエンナーレ日本館展示を主催するなど、国際文化交流事業を行うことを目的とした、外務省が所管する独立行政法人である。キャプションに曰く「ある国でのビエンナーレへの出品をキュレーターから打診された際に、主催者の国際交流基金よりNGが出た」「『安倍政権になってから、海外での事業へのチェックが厳しくなっている。書類としての通達はないが、最近は放射能、福島、慰安婦、朝鮮などのNGワードがあり、それに背くと首相に近い部署の人間から直接クレームがくる。』とのこと。NGワードをぼかすような編集も提案されたが、結局は他の作品を出品することで合意」

「首相に近い部署の人間から直接クレームがくる」のが本当かどうかは、もちろん確認不可能である。しかし、現政権の中枢に近い人々や彼らの顔色を窺う人々が、現代の文化芸術表現にかつてないほど神経質になっているのは確かなことのようだ。いまの交流基金は国内事業よりも海外発信に力を入れているが、海外で行った展覧会の国内凱旋展をサポートしたり、キュレーターの人的交流に予算を割いたりと、国内の美術館との関わりはそれなりに深い。韓日の例を見ると、現代アートに個人的な関心など無く、保身に汲々としている文化官僚の口出しは今後ますます増えるかもしれない。アーティストと美術館（と観客）にとっては難儀なことである。

前のページ ← | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 →

▼ この筆者のコラム

終章 現代アートの現状と未来 2017.07.14

絵画と写真の危機 2017.06.19

現代アート採点法 2017.05.16

現代アートの動機（4）：エロス・タナトス・聖性 2017.04.17

現代アートの動機（3）：思想・哲学・世界認識／私と世界・記憶・歴史・共同体 2017.03.29

現代アートの動機（2）：制度への言及と異議／アクチュアリティと政治 2017.03.09

現代アートの動機（1）：新しい視覚・感覚の追求／メディアの探究 2017.02.14

▶ 記事一覧へ

▼ プロフィール



小崎哲哉

1955年、東京生まれ。ウェブマガジン『REALTOKYO』『REALKYOTO』発行人兼編集長。京都造形芸術大学大学院学術研究センター客員研究員。2002年、20世紀に人類が犯した愚行を集めた写真集『百年の愚行』を刊行し、03年には和英バイリンガルの現代アート雑誌『ART iT』を創刊。13年にはあいちトリエンナーレ2013のパフォーミングアーツ統括プロデューサーを担当し、14年に『続・百年の愚行』を執筆・編集した。